

## 「口頭発表指導について」

—海外の日本語教育においてスピーチコンテストに続くもの—

国際交流基金 ブダペスト事務所 岩澤 和宏  
ブダペスト商科大学 講師 (JOCV) 橋本ゆかり

### 0. はじめに

海外における日本語学習者が日頃の学習の成果を発表する場のひとつとしてスピーチコンテストがある。スピーチコンテストに出場し大勢の前で発表することが、日本語学習のインセンティブになっている部分は確かにある。しかし、年に一度のスピーチコンテストも回数を重ねるに従って、イベント自体の新鮮さが失われたり、学習者の側もそれ程出場に意欲を示さなくなるという一面もある。

本稿では、ハンガリーでの例を中心に、スピーチコンテストの持つ問題点を分析し、その改善策や新たな試みの可能性を探る。また、2001年6月～7月に国際交流基金ブダペスト事務所で行った「日本語セミナー」の分析を踏まえて、口頭発表指導はどうあるべきかについて考察する。最後に討論・ディベートのイベント化の可能性を探る。

### 1. スピーチコンテストの現状—ハンガリーを中心に

ハンガリーにおけるスピーチコンテストは今年で9回目を迎える。初等・中等教育段階での日本語学習者が多いことから、「高校生以下の部」と「大学生以上の部」の2部制をとっている。ハンガリー国内で習得した成果を競うとの観点から、滞日歴3ヶ月以上の学習者には出場資格がない。出場希望者には発表予定原稿を提出させ、事前審査を行っている。特に出場者枠を設けてはいないが、出場者数は毎年20名弱である。近年「大学生以上の部」の出場者がやや減少気味である。

ハンガリーでは在ハンガリー日本国大使館、国際協力事業団ハンガリー駐在員事務所、国際交流基金ブダペスト事務所といった公的機関が基本的な運営を行い、それに日本航空ウィーン支店を加えて共催という形をとっている。中東欧地域の他の地域でも大使館が主催、または共催している点は共通している。航空会社が共催の形をとっているところもある。

### 2. スピーチコンテストの問題点

#### 2.1 イベントとしての成功と日本語教育の成果が必ずしも一致しない

ハンガリーにおけるスピーチコンテストは大使館を会場に行われ、テレビカメラが入ることもあり、イベントとしては成功していると言えるだろう。ハンガリー人の日本語学習者だけではなく、発表者の家族・知人で会場は賑わい、スピーチコンテストを日本語・日本文化の広報活動として捉えた場合、その効果は大きい。

但し、問題はイベントとしての成功と日本語教育の成果が必ずしも一致しないことである。スピーチコンテストの教育的効果とは、日本語学習者がスピーチコンテストでの発表を成功させるために

日々の日本語学習に励むこと、また発表準備の課程で新しい語彙・文型を習得したり発音を矯正したりすることだと考えられる。しかし、この点については日本語教育関係者より疑問の声がある。

発表者はスピーチ原稿を暗記して本番に臨むことが多く、それ自体は発表者の態度として正しいことだと考えられるが、問題は暗記してきたスピーチにより発表者の日本語能力、特に口頭発表能力を計ることが出来るのかという点にある。

## 2.2 スピーチコンテストが日本語学習者にとって魅力に欠ける理由

イベントとしては成功しているスピーチコンテストだが、それでは毎年多くの日本語学習者が出場を希望するののかというと、必ずしもそうではない。その理由を以下に述べてみたい。

- ・前年とほぼ同じ

毎年ほぼ同じようなやり方で行われているので、日本語学習者には新鮮味に欠ける。チャレンジがない。新しい風が吹かない。

- ・審査基準が不明確

日本語教育関係者だけが審査員をしている訳ではなく、審査結果に発表者が納得しないことがある。

- ・賞品に魅力がない

例えば「電子辞書」のように日本語学習を奨励する上で有効、かつ学習者に魅力的な物は入手が難しい。加えて、先に述べたように公的機関が主催している関係で賞品の選定にも一定の制限があり、毎年ビデオデッキ、ラジカセ、辞書といった「定番」に落ち着く。経済発展を続けているハンガリーにおいてそれらは一時ほどの魅力はない。

- ・「スピーチ」そのものの価値が下がった？

「スピーチ」そのものがなくなることはないが、以前ほどの価値がなくなったと言えるかもしれない。様々な技術改革により、「スピーチ」しなくても済むことが多くなった。

また、日本国内でも外国人によるパワーとスピードの日本語がテレビメディアに登場することが多くなり、「スピーチ」という「地味な」発話行為を凌ぐ勢いがある。

## 3. 新しい試み

スピーチコンテストをより魅力的で学習者の能力を発揮できる場にできるよう、いくつかの試みが検討されている。また、スピーチコンテストに代わる口頭発表の場を作り出そうとの案も出されている。

### 3.1 スピーチコンテストにおける「原稿なしの即興スピーチ」

スピーチは本来用意した原稿をそのまま発表するべきものではないが、実際には発話内容をその場で考え出すことは殆どない。そこで、発表者の本当の口頭能力を引き出すために、発表準備の時間を制限し原稿を書く時間を与えずにスピーチさせることを検討している。

### 3.2 国際スピーチコンテスト

国際とは言え先ずは中東欧地域に限られることになるだろうが、各国のスピーチコンテストで優秀な成績を修めた者を一堂に集め、3.1 で述べた「即興スピーチ」を含めたより高度なスピーチを課す。国際スピーチコンテストに出場するには各国のスピーチコンテストで優秀な成績を修めねばならな

いことで、各国のスピーチコンテストも活気付くこと、また国際大会の出場者はお互いから刺激を受け、更に日本語の学習意欲が高まることを目指す。また、国毎の日本語学習に対する姿勢の違いを認識したり、国境を超えた日本語学習者同士の人脈形成も期待できる。

### 3.3 国際討論会/国際ディベート大会

3.2 では、折角各国から学習者が集まったにも関わらず、基本的には自分の考えを述べるだけである。考えを異にする者に対してはより深い説明を求めたり反論したり自説を展開したくなるのが自然な感情であるから、それを発話意欲に結びつけることができれば、より高度な口頭発表に結び付くことが期待できる。

それが国際討論会という形になればより効果的であろうし、ディベート大会まで引き上げることが出来れば、更に高度な口頭発表が期待できる。

## 4. 討論指導の実際

### 4.1 「日本語セミナー」の概要

国際交流基金ブダペスト事務所では、ブダペスト商科大学の協力を得て「討論/ディベート」に焦点を当てた「日本語セミナー」を行った。

- 日時 : 2001年6月21日から7月26日まで、週1回2時間  
 場所 : 国際交流基金 ブダペスト事務所  
 対象学習者 : ブダペスト商科大学の2・3年生を中心に他大学の学生、社会人  
 ゲスト : 在ハンガリーの日本人、日本人大学生他

### 4.2 ブダペスト商科大学の日本語教育カリキュラム

「日本語セミナー」においてはブダペスト商科大学の2・3年生が多数を占めたが、同大学の日本語教育カリキュラムについて簡単に紹介していきたい。

ブダペスト商科大学では、実用的なビジネス日本語を習得することを目標とし、文法、会話、読解、作文などの授業を行っている。学生の大半は1年次にゼロ初級からスタートし、2年、または3年の前半までに初級文法を終える(表1参照)。

表1「ブダペスト商科大学の日本語教育カリキュラム」

	文法	読解	会話	作文
1年生 未習者	『みんなの日本語Ⅰ』		『みんなの日本語Ⅰ』	
2年生 未習者	『日本語コース初級』 文教大学留学生別科	『読解20のテーマ』 『日本語を楽しく読む本』	テーマに沿ったスピーチ (自作教材)	
2年生 既習者	『Situational Functional Japanese』		テーマに沿ったスピーチ (自作教材)	
3年生 未習者	『日本語コース初級』		ビジネス会話 (自作教材)	『らくらく日本語ライティング』

学習時間数 1年：200時間 2年：150時間 3年：150時間

合計 500時間 (1時間(1コマ) = 40分)

#### 4.3 日本語セミナーの実際

##### 4.3.1 方法

授業はスピーチから行った。これは、討論で意見表明や反論等をする際の基礎として、スピーチ練習が有効であると考えたためである。様々な小テーマについて自分の意見を表明する練習を行った後、討論に入った。

討論では、司会・書記・賛成者・反対者に役割を決め、ひとつのテーマにつき30分ほど時間をかけた。しかし始めのうちは、学生の意見が賛成と反対にバランスよくわかれず、討論もスムーズに進まなかった。そこで日本人ゲストを呼び、討論に参加してもらい、賛成・反対のうち意見の少ないほうについてもらうようにした。また初めは、司会・書記などの難しい役割は日本人が担当した。

日本人ゲストを招いたことは効果的だった。討論の中で、学習者は日本人が使用した表現や単語を積極的に学びとり、すぐに自分でも使ってみるなどしていた。

討論全体を通して、学習者の意見は賛成と反対にバランスよく分かれるということが少なかった。これは学習者のレベルが十分でないためでもある。つまり、たとえ意見があってもそれを日本語で表現できないため、うまく意見が述べられる学習者と同じことを繰り返してしまうのである。しかしこれは、セミナーが終りに近づき、学習者が授業に慣れてくるのにしたがって改善されていった。

##### 4.3.2 テーマについて

討論がうまく進むかどうかは、テーマによってかなり違っていた。今回扱ったテーマのうち、意見が出にくかったものと、出やすかったものの一例をそれぞれ以下に紹介する。

[意見が出にくかったテーマ]

- ・ 2004年のハンガリー EU加盟についてどう思いますか。
- ・ シングルマザーについてどう思いますか。
- ・ コンピューターが普及することを歓迎する。
- ・ 日本の映画について、どう思いますか。
- ・ 結婚後女性は仕事をせず、家事に専念するべきである。 など

[意見が出やすかったテーマ]

- ・ ブダペストの生活についてどう思いますか。
- ・ 賃金が高くてあまり好きではない仕事より、賃金が低くても好きな仕事をえらぶほうがいい。
- ・ 外国語学習には、その言葉が話されている国へ行くのが最善の方法である。
- ・ 外国語はまず英語から勉強するべきである。
- ・ マリファナは合法化されるべきである。
- ・ 団体旅行よりも個人旅行のほうがいい。
- ・ 映画はビデオで見るよりも、映画館で見るほうがいい。 など

以上から、テーマはとくに身近で且つ興味のある話題こと、語彙が簡単で話やすいこと、賛成と反

対に意見が分かれやすいことなどに注意して選定すると良いと思われる。

## 5. 今後の展望

### 5.1 口頭能力指導法としてのスピーチと討論の学習効果

口頭能力指導法としてのスピーチと討論には、それぞれ異なった学習効果があると思われ、この場でどちらが良いとは一概に言うことはできない。

スピーチ指導では、インプットにかける時間が多くなる。原稿作成時に語彙・文型・表現等を導入し、覚えていくので、初級の段階から取り入れられる方法である。また、練習時に発音指導もできる。

だがスピーチは、話者が複数の聞き手に対して行うものであるから、日常的なコミュニケーションの中で行われるような、双方向的な会話を学ぶことにはあまり適していない。スピーチの手法は学べるが、コミュニケーション能力の育成には適していないと言える。

それに対して討論指導は、どちらかといえばアウトプット中心の作業になる。学習者は自分が持っている知識の範囲内で話そうとする。たとえば、語彙の不足を補うために、知っている簡単なことばで言い換えたり、時には身振り手振りを使ったりもして、自分の能力の限界を補うために様々な方策を使う。会話は双方向になり、日常生活で行われるのとより近い形になる。しかしスピーチのように、初級学習者からできるというものではない。また討論中に文型・語彙の導入をしたりや発音指導をすることは、話の流れを遮ることになるので難しい。

### 5.2 イベントとしての可能性—スピーチ、討論、ディベート

ハンガリーにおけるスピーチコンテストについて、JICA/JOCV ハンガリー駐在員事務所長の高嶋俊政所長は、パリにおける地域会議欧州・中近東地域の JICA 事務所関係者が出席する会議で以下のように述べている—『広報活動』（2000. 11. 7）報告より引用—。

- ・ ポスター・チラシ等の広報活動をしたことにより、数多くの関係者が出席した。
- ・ テレビに放映されたことにより、ハンガリー国内の日本語及び日本文化の関心度を高めるインパクトを与えた。
- ・ 協力隊員が役員等で積極的に活躍したことにより、JICA/JOCV の事業の知名度と評価が向上した。（日本大使館、国際交流基金、配属先、日本・ハンガリー関係者等から数多くのお褒めの言葉を頂いた。）

開催者側はイベントとしての成功を評価している。しかし、スピーチコンテストが単にイベントとしてではなく、日本語の口頭能力を測定する場として適しているかという点、疑問が残る。

前にも述べたように、スピーチから測定できることはスピーチ能力で、それは口頭能力と必ずしも一致するものではない。原稿を暗記し、効果的なスピーチができれば、口頭能力がそれほど高くなくとも良い評価が得られる。

つまりこのようなイベントが、日頃培ってきた日本語の口頭能力を測定する場であるという考え方に立てば、スピーチコンテストには問題あると言え、したがって口頭能力を測定するという観点からは討論会のほうが適していると思われる。

しかしイベントとしては、討論会で個人を表彰することは難しく、商品なども出しにくい。また、測定・審査方法等もスピーチより難しくなると思われる。

また今回は行わなかったのだが、ディベートについては次のように考えている。

言うまでもなくディベートにはディベートの技術が必要となる。これが日本語の口頭能力育成とどう関わるのかはまだわからない。しかし少なくとも上級レベルの学生にとって活躍の場ができる。また採点しやすく、勝敗もはっきり着くので、イベントとして扱いやすいという長所もある。近隣諸国等を含めた国際ディベート大会などに発展すれば、さらに注目度も増し、学習者の参加意欲も大きくなるのが期待できるのではないか。初級学習者の発表の場がスピーチコンテストから始まるならば、ディベートはそれに続くものとして、上級学習者のイベントになる可能性をもっていると思われる。

## 6. まとめ

以上、ハンガリーにおけるスピーチコンテストや討論指導などを例に挙げ、口頭発表指導はどうあるべきかについて考察してきた。国や機関により学習者のレベル・到達目標が異なり、従って必要とされる指導法が異なることは言うまでもない。

ただ、日本語は最早特殊言語ではなく、日本語をどのくらい習得したかではなく日本語を使って何か出来るのかという点に焦点が移りつつあることは世界的な流れだと思われる。

口頭発表に関しても、スピーチコンテストだけが発表の場であるという時代は過ぎ、それに続く何かを模索しているのが現在の世界的な状況ではないだろうか。

本稿はその準備段階での考察であったが、新しい試みを実施した後の考察こそ必要であると感じている。